

Title	ムードとテンス・アスペクトの相関性をめぐって
Author(s)	工藤, 真由美
Citation	阪大日本語研究. 16 P.1-P.17
Issue Date	2004-03
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/4451
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

ムードとテンス・アスペクトの相関性をめぐって

Correlations of mood, tense and aspect

工藤真由美
KUDO Mayumi

キーワード：文の陳述性、終止形、ムード・テンス・アスペクト体系、認識的ムード、エビデンシャルティー (evidentiality)、構文的機能、形態論的体系

【要旨】

本土日本語と琉球語（那覇方言）との接触言語であるウチナーヤマトゥグチにおけるエビデンシャルティー (evidentiality) を例として、ムードとテンス・アスペクトとの切り離しがたい相関性について述べる。これは、標準語と諸方言の述語構造の総合的記述を進めていくために、従来行われてきたアスペクト・テンス研究を超えて、ムード・テンス・アスペクトの三位一体的関係を考えていくべき段階に至っていることを示している。

1. はじめに

グローバル化の現在、世界の様々な地域での言語接触の研究が盛んになってきているが、日本国内でこれが最もダイナミックに起こっているのが沖縄地域である。ここでは、伝統的な琉球語（那覇方言）と本土日本語との接触・混交によって生まれたウチナーヤマトゥグチを取り上げる。

標準語では「隣の犬が死んだ」といった場合、話し手が犬の死ぬ現場を目撃したかどうかは分からないのであるが、ウチナーヤマトゥグチで「隣の犬が死によった」といえば、これは<目撃証言>であって、話し手が死ぬ現場を目撃したことを明示する認識的ムードである。また、標準語では「隣の犬が死んである」とは言えないが、ウチナーヤマトゥグチでは、<目撃した証拠に基づく推論（判断）>を表し、血痕という客観的証拠の目撃に基づいて、話し手が隣の犬が死んだことを判断・推論することを示す認識的ムードである。ここには、時間に関わる文法的カテゴリーであるテンス・アスペクトと、認識的ムードとの興味深い相関性が潜んでいて、「時間と認識との関係」を考える上で、射程の広い問題を提起しているのである。

標準語のみならず様々な方言の動詞述語の記述的研究において、テンス・アスペクトという時間に関わる文法的カテゴリーとモードとの関係、つまりは、動詞述語におけるモード・テンス・アスペクトという3つの側面の関係のありようを考えてみるべき段階に至っているように思われる。以下では、まず、〈文の陳述性〉、動詞の〈終止という構文的機能〉と、モード・テンス・アスペクトという〈形態論的体系の三位一体性〉を提示した奥田論文を引用する。次に、類型論的研究を中心とする一般言語学における、モード・テンス・アスペクトの相関性 (interconnectedness、interaction) に関わる論考の一部を引用する。両者は、その基本的枠組みにおいて異ならないと思われる。その上で、1つの具体例として、本土日本語と琉球語 (那覇方言) との接触言語であるウチナーヤマトグチにおけるエビデンシャルティ (evidentiality) に関わる形式を取り上げ、動詞述語 (終止形) におけるモード・テンス・アスペクトの切り離しがたい相関性について述べる。

2. 文の陳述性とモード・テンス・アスペクト体系

奥田靖雄は、〈文の陳述性〉と〈動詞の終止形〉と形態論的カテゴリーとして三位一体的なものとしてある〈モード・テンス・アスペクト体系〉との相関性を、「動詞—その一般的特徴づけ—」(奥田1996)において、次のように提示している。この理論的枠組みは、従来行われてきたアスペクト、テンス、モード (モダリティ) を形態素主義的に記述するものは別にしても、アスペクトとテンスだけをともに〈時間〉に関わる文法的カテゴリーとして相関的に扱う記述の仕方とも、一線を画しているものであることに注意しなければならない。奥田は、〈文の陳述性〉を考えることから、モード・テンス・アスペクト体系を考えていくのである。以下は、上記「動詞—その一般的な特徴づけ—」の§4の部分の引用である。この論考は、§1品詞としての動詞、§2動詞の語彙・文法的な系列、§3動詞の構文的な機能と形態論的な体系、§4文の陳述性と終止形、から成り立っているが、奥田(1997)では、§1と§2の部分のみが公刊されている。ここで割愛した§3においては、〈終止〉〈連用〉〈連体〉〈条件〉の4つの構文的機能に応じて、それにふさわしい形態論的体系が成り立つこと、つまりは、形態論的形式のもつ意味・機能は、構文的な機能のなかでしか明らかにはならないことを述べている。(なお、下記の太字部分は工藤による。)

§4 文の陳述性と終止形 動詞の終止形は、文の陳述性 predicativity を表現するための、形態論的な手つづきとしてはたらく、ということのうちにその使命がある。動詞の終止形は、文の述語の位置にあらわれながら、文にえがきだされている対象的な内容として

の出来事を現実の世界に関係づける、というはたらきをもたされているのである。そのために、動詞は、終止形において、ムード・テンス・アスペクトのカテゴリーのなかに整理される、さまざまな文法的なかたちをそなえる、ということになる。終止形 finite form は、陳述形 predicative form とよびかえても、さしつかえないだろう。もし、このような結論が正当であるとすれば、まえもって《文の陳述性》とはなにかということを理解しておかなければならない。

言語では、文において、話し手が言語外的な出来事を確認し、通達する。はなし手は、文において、期待とか欲望、勧誘とか命令など、みずからの意志をあい手につたえる。そうであれば、文はなによりもまずその内容に出来事をえがきだす、ということになる。そして、文にえがきだされる出来事を《文の対象的な内容》とよぶとすれば、その対象的な内容としての出来事は、つねにはなし手の立場からの《私の確認》であったり、《私の意志表示》であったりするだろう。話し手は《私》の立場から文の対象的な内容としての出来事を言語外的な出来事に関係づける。こうして、対象的な内容をとおして、はなし手と現実との関係がなりたつ。ひとくちでいえば、文の陳述性とはこういうことなのである。

はなし手がとりむすぶ、対象的な内容をとおしての、《私》と現実との関係の仕方を《文のモーダルな意味》とよぶことにする。文にとっては、モーダルな意味は対象的な内容につきまといて、その存在は義務的である。それがかけていれば、文は成立しない。文は《私》の確認であったり、意志表示であったりして、そのモーダルな意味はさまざまである。文のモーダルな意味の総体をモダリティー modality と呼ぶことにする。文の陳述性はなによりもまずモダリティーである。しばしばふたつの規定がひとしくなるのは、モダリティーの重大さをものがたっている。

終止形のムードのかたちは、文のモーダルな意味の表現手段としてはたらいっている。しかし、動詞の終止形のムードの意味がすなわち文のモーダルな意味である、ということの意味しはしない。動詞のムードのかたちがかけている言語でも、文にはモーダルな意味がつきまといている。ある種のムードのかたち、たとえば命令法などがかけている動詞の活用表をもっている言語も、世界にはたくさんある。このばあいは、文のモーダルな意味は、別的手段によって表現されている。そして、この方が言語にとってはふつうなのである。かぎりなくともいいたい、多種多様な文のモーダルな意味を、動詞の形態論的なかたちがとらえつくす、ということはどうてい考えられない。動詞のムードのかたちは、そのごく一部分を選択的に動詞の語形変化のし方のなかに固定化しているにすぎない。それぞれの言語が動詞のことなるムードの体系をもっているのは、そのためである。

たとえば、「すればいい」「してもいい」のような合成の述語があって、動詞のムードの

かたちではとらえようのない、文のモーダルな意味を表現している。「するのだ」のような述語の説明のかたちが、あるいは「しないのか？」という疑問文のかたちが、ひろい意味での命令を表現するために利用される。これらは文の現象であって、形態論にはならない。「わけだ」「はずだ」「つもりだ」のような名詞は、動詞とくみあわさることによって、はなし手の論理的な展開の過程を表現する。文のモーダルな意味のゆたかさは、形態論によってはとうてい説明しつくすことはできない。

ところで、具体的な現象としての出来事は、つねに時間の流れのなかにあって、そのそとにはありえない。時間は出来事の普遍的な存在形式なのである。とすれば、その具体的な出来事をえがきだす文では、その出来事の時間的なありか限定をはぶいては、文そのものが成り立たなくなる。現実の世界の具体的な出来事を文にえがきだす、ということは、文の対象的な内容としての出来事に時間的なありか限定をあたえるということの意味している。こうして、文の時間性 temporality は、文の陳述性の、ひとつの要素としてあらわれてくる。《一般時間的な》とか《時間外的な》という用語がしばしばもちいられるが、それは／任意の時間にいつでも／あるいは／かぎられた時間帯のなかでたえず／という意味であって、出来事の時間性を完全にきりすてている、ということではない。出来事の時間が一般化されているのである。

文は、えがきだされる出来事にアクチュアリティをあたえるために、述語動詞のテンスのかたちに時間の連用修飾語あるいは時間の状況語をくみあわせながら、その出来事の時間的なありかを限定しなければならない。たとえば、「いまきた」「いまゆく」「きょねんくれにきた」「らい年の春にゆく」のように。とすれば、文のテンポラリティーは、動詞のテンスのかたちによって表現されているわけではない。テンスは、出来事を現在、過去、未来のプランに関係づけるだけに終わっていて、さらなるデタリゼーション detailisation は、連用修飾語あるいは時間の状況語にまかされる。動詞にテンスがかけている言語もある。

ところで、文にえがきだされる出来事に時間的なありか限定があたえられるとすれば、その限定された時間にその出来事が展開の過程の、どのような局面にあるか、出来事自身の内的な時間構造をあきらかにすることがもとめられる。つまり、出来事に、つまり動作や状態や変化に局面としての《はじまり》があり、《なか》があり、《おわり》があるとすれば、与えられた時間的なモメントにその出来事がどの局面にあるか、あきらかにすることが必要になるのである。なぜなら、いくつかの出来事のぶつかりあいのなかで、あるいは連鎖のなかで、ある、ひとつの出来事をとらえなければならないからである。ということは、他の出来事との時間的な関係のなかで、その、ひとつの出来事をとらえる、という

ことを意味する。そして、あたえられた、ひとつの出来事は、他の出来事との時間的な関係のなかで、はじまったばかりであったり、進行のただなかであったり、もうおわってしまっていたりしているとすれば、その局面のなかに、その、ひとつの出来事をさしださなければならない。具体的な出来事をさしだす文は、出来事をその時間的な内部構造のなかにとらえてみせなければならない。

文にえがきだされる、具体的な出来事は、時間的な内的構造につきまといわれている。この、えがきだされる出来事の時間的な内部構造をアスペクチュアリティー-aspectuality とよぶことにする。そして、時間的なありか限定をうけている、べつの出来事を座標軸にして、あたえられた出来事の時間的な局面が特定されるのであれば、aspectuality は temporality とからみあって、現象することになるだろう。出来事の時間的な内部構造は、べつの出来事との外的な時間的な関係のなかでとらえられる。

さて、以上の記述から、文にえがきだされる出来事は、現実との関係の仕方として、モダリティー、テンポラリティー、アスペクチュアリティーにつきまといわれている、ということになる。つまり、文の対象的な内容としての出来事は、現実にたいする《私》の関係の仕方として存在している。そして、その出来事は、《私》の《はなす》という行為との時間的な関係のなかに配置されている。そして、また、他の出来事との外的な時間構造のなかに配置される。このとき、つまり、他の出来事（私のはなすという行為をも含めて）との外的な時間構造のなかで、文にえがきだされる出来事は、みずからの内的な時間構造をさらけ出すことになる。たぶん、文の陳述性の具体的な内容とは、こういうことなのだろう。

ところで、動詞を述語にする文においては、終止形のムード・テンス・アスペクトが、文の modality、temporality、aspectuality の表現手段としてあらわれる。しかし、文にさしだされる出来事の外的な時間、その出来事の内的な時間、その出来事にたいする《私》の関係のし方は、動詞の終止形のテンス・アスペクト・ムード以外の、様々な手段によっても表現されていて、終止形はその表現手段のうちの一つなのである。とすれば、文の現象としての、temporality、aspectuality、modality と動詞の終止形とはげんみつにくべつしなければならない。たとえば、動詞に命令法がかけているとしても、命令文はある。動詞にテンスのかたちがかけているとしても、文は現在、過去、未来という出来事の時間を表現することはできる。文の temporality、aspectuality、modality を動詞の終止形のテンス・アスペクト・ムードに解消させることはできない。前者は後者よりはるかにはばひろい概念であって、後者によってくみつくすことはできない。たとえば、「していい」「してもいい」「すればいい」のようなくみあわせによってつくられる述語は、まだ形態論の領域のなかに

ははいつてこないが、文のモーダルな意味の表現者として、modality のなかで重要な位置をしめている。また、「するところだ」「したばかりだ」「しようとしている」のようなくみあわせは、まだ形態論的な事実ではないとしても、aspectuality の領域のなかで重要なやくわりをはたしている。

しかし、こうすることによって、動詞の終止形のはたらきをひくく評価したことにはならないだろう。じっさい、**動詞の終止形のテンス・アスペクト・ムード**は、これらの形態論的なかたちを所有する動詞を述語にする、動詞述語文においては、temporality、aspectuality、modality の意味領域で、もっとも基本的な、中心的な、かかすことのできない部分としてはたらきながら、そのほかの補足的な諸手段をみずからにしたがえている。したがって、文の陳述性は、動詞述語文においては、なによりもまず、動詞のテンス・アスペクト・ムードのかたちのなかに表現されている、といえるのである。形態論的な現象としての動詞の終止形は、つねに文の構造のなかにあつて、その、それぞれのかたちのなかに、その体系性のなかに文の陳述性を言語的な事実として客観化している。こうして、文の陳述性の直接的な表現者として、テンス・アスペクト・ムードをみる、形態論的なアプローチは成立するし、ゆるされるし、必要になる。その使用において、補足的な諸手段が、動詞のテンス・アスペクト・ムードのかたちとくみあわせりながら、陳述のさまざまなヴァリエーションをつくりだしている、という事実さえわすれなければ。そして、さまざまな合成の述語があつて、動詞のテンス・アスペクト・ムードのかたちでは表現することのできない、temporality、aspectuality、modality を表現している、という事実をわすれさえしなければ。こうして、形態論的な現象としてのテンス・アスペクト・ムードは、いくつかの意味で、構文的な現象としての temporality、aspectuality、modality の土台をつとめている、ともいえる。その意味では、形態論的な現象としてのテンス・アスペクト・ムードの研究は構文的な現象としての temporality、aspectuality、modality の研究に先行しなければならない。

3. 欧米の一般言語学における TAM 体系

下記に引用したの5つの代表的文献においても、上記の論述と同じく、ムード・テンス・アスペクトという3つの側面の相関性が提示されていると思われる。最後の引用は、ピジン・クレオール研究のものである。欧米の一般言語学では、TAM systems という言い方が最も一般的になっているようである。(以下の太字は工藤による。)

Tense, aspect, and mood are all categories that further specify or characterize the basic predication, which can be referred to as the event. Tense locates the event in time. Aspect characterizes the internal temporal structure of the event. Mood describes the actuality of the event in terms such as possibility, necessity, or desirability.

The different temporal locations of an event - past, present, and future-are inherently correlated with differences in mood and aspect. An event that will occur after the speech moment is non-actual and potential. Hence there is a correlation between future tense and non-actual potential mood and, by implication, between non-future tense and actual mood. An event that is ongoing at the speech moment has not been completed. Hence there is a correlation between present tense and incomplete (imperfective or progressive) aspect and, by implication, between past tense and complete (perfective or non-progressive) aspect. A consequence of these correlations is that temporal distinctions may be expressed by morphosyntactic categories that have wider modal or aspectual functions. (Shopen(ed.)1985:202-206)

The division within the TAM notional space into tense, aspect and modality is far from spurious. . . . In describing the three major categories and their sub-components or variants, we will initially maintain the pretense that each forms a separate, self-contained functional domain. Such pretense is convenient for the purpose of exposition, but is probably ultimately not warranted. Synchronically, diachronically and ontogenetically, TAM categories are interconnected, as well as connected to other regions of our conceptual map. (Givón1984:272)

The variations that have been observed among languages concerning the representations of tense, aspect and mood derive primarily from the fact that the three categories are closely interconnected. Both tense as well as aspect denote temporal notions, with tense indicating the position of an event on a linear time-scale in relation to a reference point, and aspect indicating "the internal temporal structure" of an event. However, the two are also interconnected as both of them deal with the "temporal structure" of the event. This point gets reflected in facts such as, for example, that a completed event tends to be past whereas a continuing event tends to

be present or future.

Similarly, tense and mood are quite distinct from one another, but are still interconnected. Mood indicates the reality of an event. It also refers to the kind of evidence that can be adduced in support of the claim that it occurred. However its relatedness with tense is shown by the fact that events which were observed (in the past) or the ones which are being observed (in the present) tend to be associated with realis mood, whereas the ones which were not observed (the future events) tend to be associated with irrealis mood.

It is apparently this interconnectedness of tense, aspect and mood which makes it possible for some languages to choose one of them as the primary notion of their verbal system. (Bhat1999:93)

It has come to be recognized in recent years that modality is a valid cross-language grammatical category that can be the subject of a typological study. It is a category that is closely associated with tense and aspect in that all three categories are categories of the clause and are generally, but not always, marked within the verbal complex. (Palmer2001:1)

For the European-lexifier pidgins and creoles at least, it is the interaction of these three constituents — specifically, tense and aspect but also aspect and mood — that has given rise to the pidgin and creole TMA systems furthest from Bickerton's prototype. The articles that follow make this point in diverse ways. (Singler (ed.)1990:xiv)

日本語においても、動詞述語の終止形は、ムード・テンス・アスペクトの複合体としてあると思われる。ムードは、話し手の立場からの、文の対象的内容としてある事象（出来事）と現実との関係の様々を表し分ける。そしてこのようなムードのなかに与えられる事象（出来事）は、話し手の発話行為時を基準軸とする外的な時間関係のなかに配置される。これがテンスである。そして、テンスという外的時間的位置づけをうける事象（出来事）は、その内的な時間構造において、進行中であつたり、結果段階にあつたり、あるいは自らの時間的限界に到達して完成であつたりする。この意味でアスペクトは、動詞の語彙の意味と最も近い関係にあるといえよう。

4. ウチナーヤマトゥグチにおけるムード・テンス・アスペクト体系

ウチナーヤマトゥグチ（沖縄本島中南部）におけるムード・テンス・アスペクトについて、エビデンシャリティー(evidentiality)の問題を中心に述べることにする。この、本土日本語（標準語や主として九州方言）と琉球語（那覇方言）との接触によって生成された接触言語においては、ムード・テンス・アスペクトは、標準語よりもはるかに緊密に相関していて、ムード的側面と、テンス・アスペクトという時間的な側面とを切り離したのでは、記述は不可能なのである。エビデンシャリティーとは、Boas(1911)以来、様々な言語で指摘されてきている、話し手が伝える情報のソースを明示する文法的形式(marker used by the speaker to indicate the source of the information on which a given assertion is based)である。(本稿では、基本的な枠組みの提示にとどまり、基層をなす伝統方言における、歴史的な観点を考慮しての厳密な記述と規定については今後の課題とする。また、接触言語であることから、世代差があることを十分に考慮しておく必要がある。ここで提示するのは、40代を中心とするものである。)

4. 1. シテイル形式におけるアスペクトとムードの相関性

日本語には「アル、オル、イル」という3つの存在動詞がある。標準語と同様に、ウチナーヤマトゥグチでも、「人、動物」の場合はイル、「植物、無生物」の場合はアルである。

この存在動詞は、アスペクト形式としての文法化の語彙的資源になるという点でも重要である。この場合、「人の存在」を表す存在動詞が、中心的なアスペクト形式として文法化されることが、日本語の諸方言に共通する特徴である。標準語でも、中心的なアスペクト形式はシテイルであって、若干の動詞を除くすべての動詞を捉えている。シテアル形式も使用されるが、「流れる、降る、死ぬ、割れる、晴れる、腐る」のような動詞では使用できないことから言って、文法化の程度は低い。

ウチナーヤマトゥグチでも、有標の中心的なアスペクト形式はシテイル（シテール）である。そして、標準語と同じく、<動作の進行>（例①）と<主体の結果>（例②）の意味を表し、どちらの意味になるかは<動詞のタイプ>によって決まる。「開ける、切る、殺す、壊す、叩く、読む、飲む、歩く、降る」のような<主体動作動詞>では<動作進行>の意味になり、「開く、切れる、死ぬ、壊れる、行く、来る、座る、晴れる、太る」のような<主体変化動詞>では<主体結果>の意味になる。過去形は、標準語と同じく、シテイタ（シテータ）である。また、標準語と同様に人称制限はない。標準語と同様に<反復習慣>の

意味も表す。

①<動作進行>父ちゃんがすいか切っている。うちは昨日は本読んでいた。

②<主体結果>すいかが切れている。うちは昨日は学校行っていた。

標準語との重要な違いは、このアスペクト形式には「シテイヨウ」「シテイロ」のようなく意志・勧誘><命令>というムード形式がなく、「シトーコ」「シトーケ」(「シテ+オク」の融合形)を使用することである。話し手による出来事の確認を述べる<叙述法(indicative mood)>の場合と、<意思・勧誘><命令>のようなく<実行法>の場合とでは、異なる形式が使用される点で、アスペクトとムードとが絡み合っているのである。

4. 2. 2つのエビデンシャリティー形式

ウチナーヤマトウグチには、シテアル(シタール)形式とシヨツタ形式という、<認知的ムード>のなかのエビデンシャリティーに関わる形式が存在していると思われる。次の3つの例を比較しながら説明しよう。

(a)太郎が部屋汚した。

(b)太郎が部屋汚しよった。

(c)太郎が部屋汚してあった。

(b)のシヨツタ形式は、<話し手が動作を目撃したこと>を明示する認知的ムード形式である。従って、他の諸言語でも指摘されているように、主語が1人称であることは不可能である。(形式は同じでも、西日本方言のシヨツタ、あるいは京阪方言のシヨツタとは、まったく異なる文法的意味を表していることに注意されたい。)話し手が目撃したことを明示しない場合には、(a)のシタ形式を使用する。従って、話し手が目撃したことを明示するために、「猫が車に引かれて死によった」ということは可能であるが、「*信長は本能寺で死によった」ということはできず、この場合は「死んだ」と言わなければならない。

(c)のシテアツタ形式は、標準語と異なり、動作主体(太郎)を主語として明示する。そして<客体の結果の目撃に基づく、先行時(以前)の動作の推論>を表す。話し手が目撃した場面には、太郎という動作主体はもはや存在せず、部屋が汚された結果(客体結果)があるのみであるが、この結果を見て、「太郎が汚したのだ」と推論(inference)するわけである。「太郎の動作自体」は目撃していないので、シヨツタ形式とは異なり、この推論が間違ってしまうことも起こる。また標準語では「雨が降ってある」「人が死んである」とは言えないが、ウチナーヤマトウグチでは、地面が濡れている、血痕があるという<痕跡>を見て、「雨が降ったのだ」「人が死んだのだ」と、以前の動作や変化を推論(判断)する場合にも使用される。従って、イル、アルのような若干の動詞を除いて、すべての動詞を

捉えている。このように、シテアル形式もまたく話し手による、客体の結果や痕跡の目撃に基づく、先行時の動作・変化の推論>という認識的ムードを表しているのである。

ウチナーヤマトグチにおけるシヨッタ形式とシテアル形式は、<動作・変化自体の目撃>（従って話し手の推論はない）を表すか、<客体の結果、痕跡の目撃>（従って、動作・変化自体については推論）を表すかで対立している認識的ムード形式であると言えよう。従って、この2つの形式には、<意志・勧誘法>や<命令法>はない。

4. 2. 1. シテアル形式におけるムードとアスペクトの相関性

シテアル形式は、<客体の結果の知覚に基づく、先行時（以前）の動作の推論>または<痕跡の知覚に基づく、先行時の動作・変化の推論>を表す。この場合、<目撃（視覚）による知覚>が多いが、<聴覚、嗅覚、触覚、味覚などによる知覚>であってもよい。知覚と推論の主体は<話し手>であり、従って、1人称主語であることは不可能である。<話し手による、客体結果・痕跡の知覚>が過去の場合は、過去形シテアッタ（シターッタ）になる。動作主体の特定化ができない場合には、⑦のように「だれか」を使用する。また、「このすいか、だれが切ったーるね？」のように相手に質問することもできる。

- ③ {切ったすいかがテーブルにあるのを見て} 父ちゃんがすいか切つてある。
- ④ {物干し竿の洗濯物を見て} 母ちゃんが洗濯物干してある。
- ⑤ {猫はもういないが、座布団が暖かいのを感じて<触覚>} 猫が寝てある。
- ⑥ {お酒の臭いがするのを感じて<嗅覚>} 生徒が酒飲んであった。
- ⑦ {荷物が置いてあるのを見て} 留守の間に、誰か来てある。

シテイル形式が表す②の<主体結果>と、シテアル形式が表す③～⑦<客体結果・痕跡の知覚>とは、アスペクト的には、どちらも<終了後の段階>という点で共通するのだが、<先行時（以前）に起こった動作・変化の推論>を表すかどうかで異なるのである。次の⑧<主体結果>では、<主体結果>をただ捉えているが、⑨では「落ち葉が入っている」という<痕跡>の知覚に基づく<推論（間接的認識）>であって、話し手は、窓が開いた状態自体や、お母さんが人参を入れる動作自体は見えていないのである。従って、⑩のように、しばしば<推論の間違い>が喧嘩のもとになる。

- ⑧ {開いた窓をみて} 窓が開いている。
{切った人参を見て} 汁に人参が入っている。
- ⑨ {窓は閉まっているが落ち葉が部屋のなかに入っているのを見て} 窓が開いてある。
{すりつぶした人参の臭いを感じて} 母ちゃんが人参入れてある。
- ⑩ 「太郎が障子破つてある」「太郎じゃない。猫だーる」

以上のことから、シテアル形式は、基本的に、アスペクト・ムード形式であると言える。＜客観的状況の知覚＞に基づかない推論の場合には、「たぶん窓が開いたはず」のように言う。（この「～はず」の意味は標準語と同じではない。）またシテアル形式は、＜伝聞 (linguistic evidence)＞の場合にも使用できず、＜話し手の知覚的認識 (sensory evidence)＞に基づく推論（判断）＞に限定されている。

シテアル形式は、「太郎がこの酒飲んである」とは言えても、「*うちがこの酒飲んである」とは言えないように、基本的に1人称主語は不可能である。ただし、次のような場合には、可能である。第1には、「こんなに酒が飲んである」のように、話し手が意識不明になっていたような場合である。第2には、「すいか、切ってあるから、食べてね」「すぐ食べられるように、すいか、切ったーるよ」のように、＜意図的な結果作り＞を表す場合である。このような場合には、＜痕跡＞や＜客体結果＞というアスペクト的側面と＜気づき＞や＜意図性＞といったムード的側面とが相関してくる。

シテアル形式は、＜現在における客体結果や痕跡＞と＜以前の動作や変化の実現＞をともに捉えている点で、パーフェクトという時間的意味を表すのであるが、複数の諸言語において、パーフェクトから evidentiality への発展がみられることは、下記のように既に指摘されているところである。（なお、Comrie1976も参照）

・・・ the perfect is also the starting point or sometimes an intermediate point in different 'grammaticalization paths'. Most well-known is probably the development by which an original perfect develops into a general past tense, or sometimes rather a past perfective. ... By another path, a perfect may develop into a recent or hodiernal past. Last but not least, perfects often acquire inferential uses, which may lead to the development of categories with a basic modal or evidential meaning. (Dahl1999:291)

伝統方言も視野に入れながら、パーフェクトという時間的意味から、より主体的な認識的ムード（エヴィデンシャルティー）としての意味が、どのような文法化のプロセスを経て成立してきているのかについての精密な記述は今後の課題である。

4. 2. 2. ショッタ形式におけるムードとテンスの相関性

ショッタ形式もシテアル形式と同じく、＜話し手の知覚＞が関わっているのだが、＜動作・変化自体の知覚＞、典型的には＜目撃証言（話し手の目撃による直接確認）＞の形式で

ある。ただし、視覚（目撃）のみならず、聴覚、触覚、味覚、嗅覚であってもよい。

- ⑪ {お父さんがすいかを切っていたのを見て} 父ちゃんがすいか切りよった。
- ⑫ {見知らぬ人が玄関に入るのを見て} 隣の家に人が入りよった。
- ⑬ {夜中に雨の音を聞いて<聴覚>} 夜中に雨が降りよった。
- ⑭ {いい匂いがしたのを感じて<嗅覚>} 昨日は妹がお化粧しよった。

主語が1人称であることは不可能であって、1人称主語の場合には「このすいかはうちが切った」のように言わなければならない。

また、例⑮のような質問文の場合には、「聞き手が出来事自体を目撃（知覚）したかどうか」を尋ねることになる。（聞き手自身の動作について質問することは不可能である。）このような質問は、当然プラグマティックな制限があり、「目撃する可能性があった聞き手」にだけ質問することの意味があるのである。従って、シヨッタ形式を使った質問文では、「聞き手が目撃した可能性があった」という「話し手の判断・推論」が前提になる。このような前提がない場合には、「新聞やが来たか？」と尋ねなければならない。

- ⑮ 「新聞やが来よったか？」

シテアル形式とは異なり、<出来事自体の知覚>を表す場合には、基本的に、過去形に限定されている。（若い世代になるほど、非過去形のシヨル形式も使用されるようになっていくが、この非過去形に<知覚>という認識的ムードが確立しているかどうかの検証は今後の課題である。現在のところ、個人差が見られる。）そして、主語が1人称であることは不可能なのだが、1人称主語である場合には、次のように、<非実現（実現の直前まで至ったが実現しなかったこと）>か<反復習慣>の意味になる。⑰のように<反復習慣>の意味では、シテイタ形式、シタ形式を使用してもよい。<知覚>が可能であるのは、当然、<具体的なアクチュアルな出来事>であって、<反復習慣>という時間的限定性のないポテンシャルな事象では<思考による一般化>が進んでいるのである。また、⑯の場合、3人称主語であれば、基本的に「死ぬのを見た」という目撃証言の意味になる。ただし「やがて」（ウチナーヤマトウグチでは「もうちょっとで」の意味）のような副詞と共に起すれば<非実現>の意味になる。

- ⑯ 「昨日（うちは）おぼれて死によった」
（もう少しで死ぬところだったが、死なずにすんだ）
- ⑰ 「うちは毎日海で泳ぎよった（泳いでいた、泳いだ）」

ウチナーヤマトウグチには、以上のように<出来事の結果・痕跡の知覚に基づく推論（間接的確認）>と<出来事自体の知覚（直接的確認）>という、標準語にはない、認識的ムード（evidentiality）を基本的に明示する形式がある。このような2つの形式の存在は、<知

覚 (perception) > という「話し手による出来事の認識 (確認) のしかた」における最も原初的な姿を文法的形式に焼き付けている点で興味深いものがあると言えよう。

5. 何を認識するかと如何に認識するかの相関性

以上をまとめると、次のようになる。イル、アル、オルという3つの存在動詞が異なる文法的意味を表すものとして文法化されているのである。

- (1) イル→シテイル (シテール) = <動作進行の確認> <主体結果の確認>
 - ・主語の人称制限はなく、話し手の知覚の有無には無関心
 - ・叙述法に限定 (意志法や命令法はない)
- (2) アル→シテアル (シタール) = <客体結果の知覚に基づく以前の運動の推論>
 <痕跡の知覚に基づく以前の運動の推論>
 - ・基本的に3人称主語
 - ・意志法や命令法はない
- (3) オル→シヨッタ = <動作・変化自体の知覚による確認>
 - ・基本的に3人称主語
 - ・基本的に、過去形に限定 (意志法や命令法はない)
 - ・肯定形に限定

シテイル形式は、話し手による出来事の知覚の有無には無関心であることから、アスペクト形式であると位置づけられるが、意志形、命令形などがないことから、<叙述法(話し手の確認)>というモードに限定されたアスペクト形式である。そして、同じく知覚の有無には無関心なスル形式と、<継続—完成>のアスペクト対立を形成している。シテアル形式は、<動作の終了後の段階>を捉えている点では、アスペクト的(動作パーフェクト)であるが、同時に<知覚・推論>という認識的モードも併せ持っていることから、モード・アスペクト形式と考えるのが妥当であろう。シヨッタ形式は、過去というテンスに限定された<知覚>という認識的モード形式である。シヨッタ形式にも、シテアルとの対比上、<完成>あるいは<進行>というアスペクト的側面(動作の開始の側面を含んで)はあるのではあるが、シテアル形式よりも、モード的側面が前面化しているであろう。動作・変化の進行の局面の目撃であっても、始まってから終わるまで全体を目撃したとしても、時間のなかにアクチュアルに現象していることを知覚していれば、この形式を使用できるのである。この形式は、否定形がないという制限もある。

重要なことは、シテアル形式もシヨッタ形式も<認識的モード>であるがゆえに、命令

や意志・勧誘のような実行的ムード形式はありえないことである。

さて、従来の日本語文法論では、アスペクトは<時間的展開段階の違い>、テンスは<出来事の時間的位置づけの違い>、ムード・モダリティは<話し手の心的態度の違い>として、それぞれ切り離されて扱われるのが普通であった。しかしながら、この3つの文法的カテゴリーは、以上のようなかたちで現象する場合もある。なぜ、このようなことが起こるのかを説明するためには、結局のところ、<文の陳述性（現実との関係づけ）>の表現手段としてのムード・テンス・アスペクトの三位一体性という問題に立ち戻ることになるのである。

述語の基本的な機能は、文の対象的内容を現実と関係づけるという陳述性(predication)にある。ムードは、話し手の立場からの文の対象的内容（出来事＝命題）と現実との関係の様々を表し分ける。認識的ムードでは、<話し手の出来事の認識（確認）のしかたの違い>として表れてくる。そして、このようなムードのなかに与えられる出来事は、話し手の発話行為時を基準軸とする外的時間関係のなかに配置される。これがテンスである。そして、テンスという外的な時間位置づけをうける事象は、その内的な時間構造において、進行段階であったり、結果段階であったり、あるいは自らの限界に到達して完成的であったりする。これがアスペクトである。シヨツタ形式が表す<目撃証言>のような認識的ムードは、（発話現場には存在しない）過去のことであるというテンス的側面とむすびついてこそ、そのコミュニケーション上の存在意義があると言えよう。また、<主体結果>というアスペクト的意味はシテイル形式の方で表し、<客体結果><痕跡>というアスペクト的意味はシテアル形式の方で表すという分割も、前者は（以前の変化の）必然的な結果そのものであるので<話し手による推論>は必要なく、後者では必然性が弱くなる（あるいは、先行時における動作・変化の方へ焦点が移る）という意味で、<話し手の推論（判断）>という認識（確認）の仕方と絡み合ってこざるをえないのである。

このような意味において、出来事の時間的側面と話し手の認識（確認）の仕方の側面とはむすびついていると思われる。「時間は出来事の普遍的形式」であるとするれば、出来事の時間構造（内的であれ外的であれ）とその認識の仕方とは相関してくる。「何を認識するか」は「如何に認識するか」と相即不離であろう。

アスペクト的側面、テンス的側面、ムード的側面の相関のあり方は、言語や方言によって様々でありえよう。アスペクトだけ、テンスだけ、あるいはムードだけを切り離して記述する段階からの脱却が求められている。<動詞述語＝終止>という構文的機能における、ムード・テンス・アスペクトという3つの側面の分化の土台には、「文の対象的内容としての出来事を現実と関係づける」という意味での<陳述性（predication）>が横たわってい

る。先に引用した奥田論文でも、一般言語学の論文でも、ムード・テンス・アスペクトを、文法化が進んだ形態論レベルでの3つの相関的側面と位置づけている。(そして、だとすれば、<連体>という構文的機能のもとでは、<終止>という構文的機能のもとでの形態論的体系は成立しない。構文的機能が形態論的特徴に優先するとすれば、構文的機能抜きに形態論的形式の意味・機能を記述することはできないのである。)

日本語諸方言における動詞述語のムード・テンス・アスペクト体系のバリエーションの記述は始まったばかりであるが、標準語を含めて様々な日本語のバリエーションを統一した枠組みで記述していくにあたって、時間的側面の記述が、ムード的側面との関係づけなしには、基本的に不可能であるということを確認しておきたいと思う。

【主要参考文献】

- 上村幸雄他 (1992)「琉球列島の言語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編著『言語学大辞典 第四巻 世界言語編』三省堂。
- 奥田靖雄 (1996)「文のこと・その分類をめぐって」『教育国語』2・22。
- 奥田靖雄 (1996)「動詞—その一般的な特徴づけ—」教科研国語部会・瀬波集会レジュメ (未公刊)。
- 奥田靖雄 (1997)「動詞 (その1)・その一般的な特徴づけ」『教育国語』2・27。
- 工藤真由美 (2002)「現象と本質—方言の文法と標準語の文法—」『日本語文法』2-2。
- 工藤真由美 (2002)「日本語の多様性へのまなざし」『国語学会秋季大会予稿集』。
- 工藤真由美編 (2002~2003)『方言における動詞の文法的カテゴリーの類型論的研究 (No.1~No.6)』科学研究費報告書 (大阪大学文学研究科)。
- 高江洲頼子 (1994)「ウチナーヤマトゥグチーその音声、文法、語彙について—」『那覇の方言』沖縄言語研究センター報告書3。
- Bhat, D. N. S. (1999) *The Prominence of Tense, Aspect and Mood*. SLCS 49. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Boas, F. (1911) Introduction. In Boas (ed.) *Handbook of American Indian Languages. Part 1*. Washington: Government Printing Office.
- Chafe, W. and J. Nichols (eds.) (1986) *Evidentiality: the linguistic coding of epistemology*. Norwood, N. J.: Ablex.
- Curnow, T. J. (2002) Types of Interaction between Evidentials and First-Person Subjects. *Anthropological Linguistics* 44-2.
- Dahl, Ö. (1999) Perfect. In Brown, K. and J. Miller (eds.) *Concise Encyclopedia of Grammatical Categories*. Amsterdam: Elsevier.
- DeLancey, S. (1997) Mirativity: The Grammatical Marking of Unexpected Information. *Linguistic Typology* 1-1.
- Givón, T. (ed.) (1984) *Syntax*. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Lazard, G. (1999) Mirativity, Evidentiality, Mediativity, or Other? *Linguistic Typology* 3-1.

- Johanson, L. and B. Utas (eds.) (2000) *Evidentials: Turkic, Iranian and Neighbouring Languages*. Berlin, New York: Mouton.
- Lindstedt, J. (2000) The Perfect—aspectual, temporal and evidential. In Dahl, Ö. (ed.) *Tense and Aspect in the Languages of Europe*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Palmer, F. R. (2001) *Mood and Modality*. : Cambridge UP.
- Shopen, T. (ed.) (1985) *Language typology and syntactic description III*: Cambridge UP.
- Singler, J. V. (ed.) (1990) *Pidgin and Creole Tense-Mood-Aspect Systems*. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
- Traugott, E. C. (1995) Subjectification in Grammaticalisation. In Stein, D. and S. Wright (eds.) *Subjectivity and Subjectivisation*: Cambridge UP.
- Willett, T. (1988) A cross-linguistic survey of the grammaticization of evidentiality. *Studies in Language* 12.

本稿は、2003年7月13日に沖縄言語研究センターで話した内容に一部加筆修正したものである。本稿をなすにあたって、高江洲頼子、狩俣繁久、島袋幸子、仲間恵子、天久斉、喜屋武政勝各氏の協力を得た。記して感謝致します。

(文学研究科教授)